



TITLE:

居延漢簡に見える官吏の處罰

AUTHOR(S):

佐原, 康夫

CITATION:

佐原, 康夫. 居延漢簡に見える官吏の處罰. 東洋史研究 1997, 56(3): 433-465

ISSUE DATE:

1997-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155155>

RIGHT:

東洋史研究

第五十六卷 第三號 平成九年十二月發行

居延漢簡に見える官吏の處罰

佐 原 康 夫

はじめに

I 候官における屬吏の處罰

(1) 懲罰勞働と「財謫」

(2) 斥 免

II 劾狀の分析

(1) 劾狀の書式

(2) 劾狀の事例

III 處罰を通じて見た人事機構

(1) 彈劾處分の決定過程

(2) 缺員の補充

(3) 縣の機構の役割

おわりに

はじめに

一九七三年に發掘された、いわゆる新居延漢簡は、破城子の甲渠候官遺址を中心として行われた精密な發掘作業の結果、従来の漢簡とは比較にならないほどの密度とバラエティで新しい簡牘資料をもたらした。近年ようやく破城子出土簡の圖版が出版されて、いよいよ漢簡研究の新たな展開が可能になっている。従来の漢簡研究は、大庭脩氏に代表される冊書の復元研究と、永田英正氏に代表される一簡ごとの書式分類研究の二つの流れに大別され、それぞれ大きな成果をあげてきた。⁽¹⁾しかし新居延漢簡には、一簡ごとにはばらばらにして分類するには、書類としてまとまりがありすぎ、かといって冊書の形まで復元できるほど、きれいに揃ってもないという、一種中途半端な資料群が大量に存在する。従来の方法論では扱いにくい、これらの資料の特性を活かした整理法を模索すべきだろう。

本稿は、主として破城子出土の簡牘をもとに、漢代邊境の下級官吏に對するさまざまな處罰の制度を跡づけながら、漢代の官僚機構における人事システムの一面に光をあててみたい。従来の漢簡研究あるいは文獻史學において、人事機構の研究は常に大きなテーマだが、その中で扱われる考課制度は、なぜかエリートの出世のシステムとしてのみ考えられてきた。しかし「殿最を課す」以上、成績を上げられずに處罰されたり、失態を演じてクビになったりする官吏も、エリートと同等の割合で存在したはずである。

また『漢書』の列傳などに登場するエリートたちについても、出世の過程で一度ならず失敗して振り出しに戻り、郷里の郡縣の屬吏から勤めなおして、再び中央政界に乗り込む例が少なくない。このような失敗ややり直しは、いかなる制度的基盤を持っていたのだろうか。その答えは、文獻には現れることのない、官僚機構の最末端における人事機構にこそ求めなければならない。

これらの課題を念頭に、甲渠候官の屬吏たちが課せられたさまざまなペナルティと、それに伴う手続きや人の動き

を、多様な書類の記述から探ってみよう。なお、引用する新居延漢簡の圖版と釋文は、甘肅省博物館ほか編『居延新簡 甲渠侯官』（中華書局 一九九四）に準據する。また舊簡については、出土地と原簡番號、圖版の出版をあげる。圖版は勞幹『居延漢簡考釋圖版之部』（中央研究院歷史語言研究所 一九七七再版本）、『居延漢簡甲編』（科學出版社 一九五九）、釋文は基本的には『居延漢簡釋文合校』（文物出版社 一九八七）による。それぞれ必要な範圍で句讀點を補うなどの修正を施し、簡番號とともに圖版の頁數を示す。

I 候官における屬吏の處罰

(1) 懲罰勞働と「財謫」

居延戰線の軍吏たちは、人員の勤務狀況や候燧の備品チェックなど、さまざまな定期的査察を受け、その不備の責任を問われて處罰されていた。⁽²⁾ 例えば候史廣德の處罰を記す有名な檄（EPT五七・一〇八）は、木の枝を削って、候燧の備品類の不備がびっしりと書き込まれ、彼を責任者として笞打ち五十に處する旨が記されている。⁽³⁾ しかし軍吏の日常の仕事の中で、ほとんど絶え間なく出現する處罰對象者は、このような體罰や減俸處分を受けるよりも、むしろ一種の勞働力として活用されることが多かった。以下はそのような懲罰勞働を課せられた候長や候史、燧長の名籍である。

1 鉗庭候長王護 坐隊長謹隆誤和受一荳火、適載轉一兩到□□ EPT六五・二二八（四三二）

2 第十候長秦忠 坐部十二月甲午留燕、適載純赤重三百丈致□ A8二六二・三一（勞三四一）

3 萬歲候長田宗 坐發省治大司農茆卒不以時、遣吏將詣官失期、適爲驛馬載三壠茆五石致止害

A8六一・三十一九四・一二（甲四三二）

4 第十候長傅育 坐發省卒部五人、會月十三、失期毋狀、今適載三泉茆二十石、致城北燧給驛馬、會月二十五日畢

5 俱南燧長范譚 留出入檄、適爲驛馬運鉗庭茈甘石致止雪燧

EPT五九・五九(三四九)
EPT五九・七二(三五〇)

6 坐閏月乙卯官移府行事檄留退三時九分、不以馬行、適爲戍卒城倉轉一兩致官、會月十五日畢

EPT五九・九六(三五三)

7 長甲 坐君行塞弩五關戾□緩、適車□

A33四〇三・一五(勞五二)

8 坐移正月盡三月四時吏名籍、誤十事、適□里

A8一八五・三二(勞二六六)

9 第十候史楊平 罷卒在正月四日到部、私留一日、適運茈五百束致候官、會八月旦

A8二八五・一〇(勞三七〇)

10 坐勞邊使者過郡飲、適鹽卅石輸官

EPT五一・三三三(一八五)

11 私歸、當道田舍壹宿、今適福如牒檄到遣□

A8二一七・一六(勞五一三)

12 適士吏習詣□

A8四八六・一〇六(勞三〇九)

13 今適遷等各如牒

EPW・八二(五七五)

14 十一月五日丁丑城北卒嘗譚受卅井塞尉檄言

A8二五四・一三A(勞二二八)

適尊載甲渠候郵轉二兩□

1・2は信號傳達ミスの責任を問われた候長が、「適」(＝謫)として何かを輸送させられたことを記す。3・4では、「省卒」を引率して指定の場所に到着するのが遅れたため、候長が驛馬用のまぐさを運んでいる。6は書類の遞送の遅れ、7は郵候じきじきの巡察の折りに見つかった弩の整備不良、8は書類の書き間違い、9は「罷卒」(現地除隊した成卒)を勝手に引き留めたことにより、それぞれ食糧やまぐさを運搬させられている。10は「勞邊使者」の接待の際に酒を飲み過ぎた罰として、鹽を輸送している。⁽⁴⁾11・14は、その處分が檄書によって傳達され、執行されたことを示す。

このような懲罰としての輸送勞働は、前稿でも述べたように、戦線の補給物資輸送の補助手段として、常に活用されて

(5)
いた。

15 所受適吏・訾家・部吏卒所輸穀車兩 ☐

EPF二二・三六四(五二六)

16 ☐一歳食、遣吏迎受、今遣適吏家屬五家 ☐

EPT六五・三七八(四四二)

17 ☐所壞燧、已調適吏卒 ☐

EPT二六・一四(六〇)

18 甲渠官李充印十一月壬午卒便以來

A8二五八・一八(甲一三六二、勞二三五)

召發適吏

(B)

これらは處罰を受けた屬吏が「謫吏」と呼ばれ、その勞働の義務が家屬にも及んだことを示している。18からは、恐らく都尉府から「謫吏」を徵發する命令が來たことがわかる。謫吏の待機リストのような名籍から、必要に應じて勞働力が調達されたのだろう。

このような處分の決定は、都尉府の承認を得て、候官において下されたようである。

19 教、廿七日、以候長素精進故、財適五百束 (A)

EPF二二・五七四(五四九)

以記過候長罰、便詣部

(B)

20 ☐蕪、爲解母狀當教、以新除故、請財適三百里以戒後

EPT五・六(一一五)

21 坐傷人論、府教適 ☐

EPT五三・一七七(二七二)

19は都尉府の教書で、「候長たること素より精進なるをもつての故に」情狀酌量のついた處分を通知する。20は恐らく信號傳達ミスの處分だが、「新除をもつての故に」罰が輕減され、後々への戒めとしたいという内容で、候官から都尉府にその旨を申請したもの。「里」は「束」の書き間違ひではなからうか。21は傷害事件を起こした屬吏への處罰が、やはり都尉府の教書で決められたことを示す。

19・20の事例で、輕減された處罰は「財謫」と記される。「財謫」とは、本來ならば實際に勞働に従事すべきところ

を、まぐさの物納などによって代替した、一種の罰金處分と解される。居延都尉府管内でのローカルルールとして、このような罰則や軽減措置が設けられていたのだろう。

なお、8の事例は「適□里」と記され、他の事例と類を異にする。これが遠くの任地に飛ばされる懲罰的人事異動なのか否か、その距離が何を意味するのかといったことは、今のところ何もわからない。このような例もあることを指摘するにとどめたい。

(2) 斥 免

前節の懲罰労働は、むしろ軽い處分に屬するが、服務規程違反など内容によっては、現在で言う懲戒免職處分が行われることもある。これが「斥免」である。

22 ●甲渠言鉞庭士吏李奉燧長陳安國等年老病請斥免言府●一事集封□

EPT五一・三一九(一八五)

23 □斥免言府●一事一封四月壬申令史嚴奏封

EPT五一・七二(一五五)

24 第十三燧長王安病三月免缺移府●一事一封 五月庚辰尉史□

EPT五二・一五八(二二二)

これらは候官からの文書の發信記録で、内容の摘録が附記されている。「老病」などの理由で、候官から都尉府に屬吏の斥免が申請されている。

このような申請は、都尉府で審査された。

25 元壽二年十二月庚寅朔戊申、張掖居延都尉博・庫守丞賢兼行丞事、謂甲渠鄼候、言候長楊褒、私使卒并積

一日、賣羊部吏故貴卅五、不日迹一日以上。燧長張譚毋狀。請斥免有書。案褒私使卒并積一日、燧長張 (A)

掾宣守屬長書佐并 (B)

EPT五九・五四八(三八七・三八八)

26 □□言之。府記曰、斥免燧長□□

EPF二二・五一五(五四四)

25は居延都尉府から甲渠鄯候に宛てた、甲渠候官の二人の屬吏の斥免處分に關する書類である。斥免の對象者のうち、まず候長の楊褒は、成卒を私用に使役したこと、羊を不當に高く賣りつけたこと、天田の見回りを怠ったことによって斥免が提案されている。いま一人の燧長張譚については「毋狀」としか記述がない。「斥免を請うこと書あり」というのは、これらの處分が、甲渠候官から都尉府に具申されたことを示し、「案ずるに」以下が都尉府の判斷、あるいは候官への問い合わせ事項を記したものである。26は、都尉府からこのような問い合わせがあった時の、候官からの回答書の斷片だろう。

斥免のような重大な不利益處分を行う際には、被處分者の行狀などについての證言として、爰書が作られたようである。⁽⁶⁾

27 兵弩不檠持、案業軟弱不任吏職、以令斥免。它如爰書。敢
EPF二二・六八九(五五八)

28 ☒里上造張惠、萬歲候長居延沙陰里上造郭期、不知懷藻火、兵弩不檠持惠☒
EPT五九・一六二(三六〇)

☒斥免、它如爰書。敢言之。

29 署第十七部候長、主亭燧七所、兵弩扁戾不檠持、毋鞍馬☒
EPF二二・三九九(五三〇)

27に見えるように、斥免處分は「令」の規定に沿って行われた。直接の處分理由となっている「軟弱にして吏職に任ぜず」は、職務に不適合であるという決まり文句である。このような爰書は、候官から都尉府へ處分の申請がなされる時に、その正當性を證據立てる證言として添附されたに違いない。

斥免處分が決定されると、被處分者は候官に召し出され、處分が申し渡されて、その場で職務を解かれたようである。

30 井東燧長孫宮召詣官 斥免已遣☒
P 9四五九・二(勞五三)

31 令史麟得市陽里公乘楊萬年卅五 斥免☒☒
A 32三二・一一(勞一一九)

32 ☒寅當南候長惲敢言之、惲除位、受故候長杜彊及掾兵物、
A 10八八・一二(勞三九二)

□本不受掾所假丹弩、丹斥免在居延。邊兵當備具、唯

30は「詣官簿」の一簡で、處分の申し渡しに出頭した燧長の記録。31は肩水金關の出入記録で、令史が斥免に關係した物件で關所を通行している。32は斥免處分の後、物品の引き継ぎで生じたトラブルの例。「掾」が借り受けていた、「丹」という人物の弩が、候長の交代の際に行方不明になったらしい。「丹」は斥免されて居延におり、一民間人として本籍地に歸っていたのだと思われる。

II 劾状の分析

(1) 劾状の書式

斥免は「軟弱不勝任」といった決まり文句に見られるように、令に定められた特定の要件を満たすことを條件として行われる、行政處分であった。これに對して、裁判を経て行われる處分が、彈劾である。甲渠候官のEPT六八からは、彈劾に關係した「劾状」というタイトルの書類がまとまって出土している。その内容の多様さと面白さは、最初の發掘簡報の段階から注目されていたが、全簡の釋文と圖版の公表によって、近年ようやく全容が知られ、すでに鷹取祐司氏の研究も發表されている⁽⁷⁾。ただしその書式については、改めて検討する必要がある。

「劾状」とは、官吏が官吏を告發する彈劾という手續きにおいて、最初に作成される書類である。後述のようにこの書類は、「劾状一編」と表現される、一まとまりの書類である。その内容は「●右劾及状」(EPT五六・一一八)という簡に示されるように、「劾」と「状」の二つの部分で構成され、この順番に配置されていたと考えられる。

江陵張家山漢簡の「奏讞書」では、官吏が官吏を「劾」した事例が二つある⁽⁸⁾。「告」と「劾」の使い分けは必ずしも明確ではないが、少なくとも「劾」によって告發された場合、「劾」せられた人物の取り調べによって得られた供述は、

「它是効の如し」と結ばれる。すなわち「効」は彈効という行爲を指すだけでなく、その訴狀の名稱でもあった。居延漢簡の「効狀」にも、訴狀に當たる「効」の部分が最初にあったと考えなければならない。それに續く「狀」の部分は、「狀辭曰」で始まり、書き方は爰書によく似ている。「効」の内容を證據づける證言を添附したものと考えるのが自然である。⁽⁹⁾

以上のような觀點から、効狀の斷片を集成し、漢簡の書類の通例に則って假の配列を考え、年代順に並べたのが、次節のa~iに至る九種類のグループである。それぞれのタイトルは、書類の用途に即して、被彈効者の名前と肩書きを採った。このようなグループ分けをしてみると、各グループの中に極めてよく似た文言が二回ずつ現れる。これは「効」と「狀」が、事實上同じことを繰り返して書いていることを意味する。その分だけ中身が理解しやすくなるが、その反面、簡の配列を一義的に決めるのは非常に困難になる。したがって次節にあげるグループは、効狀の書式と書かれた内容に留意した集成であり、冊書の復元ではない。

(2) 効狀の事例

a 士吏馮匡（建武五年五月）

33 建武五年五月乙亥朔丁丑、主官令史譚敢言之

34 謹移効狀一編、敢言之

35 甲渠塞百石士吏、居延安國里公乘馮匡、年卅二歲、始建國天鳳上戊六年

36 三月己亥除、署第四部、病欬短氣、主亭隄七所、吁呼

（一簡缺。參考…EPT四八・八「吁呼不塗治、案嚴軟弱不任候望吏」）

37 七月□□除、署除四部士吏、□匡軟弱不任吏職、以令斥免

EPT六八・一（四五〇）

EPT六八・二（四五〇）

EPT六八・四（四五〇）

EPT六八・五（四五〇）

EPT六八・六（四五一）

38 ● 狀辭。公乘、居延鞬汗里、年卅九歲、姓夏侯氏、爲甲渠

39 候官斗食令史、署主官以主領吏備盜賊爲職。士吏馮匡、

40 始建國天鳳上戊六年七月壬辰除、署第十部士吏。案匡

41 軟弱不任吏職、以令斥免

42 建武五年五月乙亥朔丁丑、主官令史譚劾移

43 居延獄、以律令從事

44 五月丁丑、甲渠守候博、移居延、寫移如律令 / 掾譚

a は、採り上げたグループの中で年代の最も早い例だが、簡の脱落がある。内容と書類の成り立ちにも問題があり、典型例とすることはできない。これについては第三章で論ずることにする。

b 第四守候長原憲（建武五年九月）

45 建武五年九月癸酉朔壬午、令史立敢言之、謹移劾 = 狀 □

46 迺九月庚辰、甲渠第四守候長、居延市陽里上造原憲、與主官

47 夏侯譚爭言鬪、憲以所帶劍刃、擊傷譚、匈一所廣二寸

48 長六寸、深至骨、憲帶劍、持官六石具弩一・鎗矢銅鏃十一枚、持大

49 □囊一、盛糒三斗、米五斗、騎馬蘭越隧南塞天田出。案、憲鬪傷、

50 盜官兵、持禁物、蘭越于邊關傲亡、逐捕未得、它案驗未竟

51 □上造、居延累山里、年卅八歲、姓周氏、建武五年八月中、除爲甲

52 渠官斗食令史、備寇虜盜賊爲職。至今月八日、客民不審

53 □讓、持酒來過候飲、第四守候長原憲詣官、候賜憲・主官譚等酒、酒盡、讓欲去、

EPT 六八・九 (四五二)
EPT 六八・一〇 (四五二)
EPT 六八・一一 (四五二)
EPT 六八・一二 (四五二)
EPT 六八・一七 (四五二)
EPT 六八・一八 (四五二)
EPT 六八・一三 (四五二)
EPT 六八・二四 (四五三)
EPT 六八・二〇 (四五二)
EPT 六八・二一 (四五二)
EPT 六八・二二 (四五三)
EPT 六八・二三 (四五三)
EPT 六八・二六 (四五二)
EPT 六八・二七 (四五二)

54 候復持酒、出之堂煌上、飲再行、酒盡皆起、讓與候史候□□

55 人、譚與憲爭言鬪、憲以劍擊傷譚匈一所、騎馬馳南去、候即時與令史

56 立等逐捕、到憲治所不能及、驗問燧長王長、辭曰、憲帶劍持官弩一・箭十一枚・大 EPT六八・二五(四五三)

57 革囊一、盛糲三斗・米五斗、騎馬蘭越燧南塞天田、出西南去、以此知而 EPT六八・二六A(四五二)

58 効、無長吏教使効者、狀具此。 EPT六八・二七(四五三)

59 建武五年九月癸酉朔壬午、甲渠令史 効、移居延 EPT六八・二八(四五三)

60 獄、以律令從事 EPT六八・一四(四五二)

61 九月壬午、甲渠候□移居延、寫移書到如律令／令史立 EPT六八・一五(四五二)

62 bはすでに鷹取祐司氏が採り上げたグループであるが、配列は少々異なる。この書類は全體が「効狀一編」であり、日附・報告者の名・書類のタイトルを含む45を冒頭に置かなければ書類にならない。59～60が本文の締めくくりで、この書類が居延縣の獄に宛てて作成されたことがわかる。最後に61を附加して、甲渠候官から居延縣へ、すなわち二つの公的機關の間で送達される正式な公文書となる。

本文は46～50が彈効の訴狀である「効」、51～58がそれを證言する「狀」にあたる。「効」では事件の詳細を記したあと、49の「案」以下で彈効に該當する要件がまとめられている。他の事例では、「案」の前に黒丸をつけて、はっきりと區切ることが多い。

「狀」の部分は、「効」とは簡を別にして、通常「●狀辭曰」で始められるが、51ではその部分が缺損している。「狀」は爰書などと同様、證言者の名縣爵里と肩書き、職務内容から始まり、57～58に見えるように、「此をもつて知りて効す。長吏の効せしむることなし。狀は此に具す」という決まり文句で結ばれる。譯せば、「こうして以上のことを知り、ここに彈効いたします。上司に教唆されて彈効したものではありません。以上相違ございません」となる。このように「狀」

は、直接に彈効した者自身の證言であり、「効」とほとんど同じ内容を持つのも當然である。

事件は、甲渠郭侯を訪問した客人と酒盛りをした際に、第四守侯長の原憲と主官令史の夏侯譚が喧嘩をし、原憲が夏侯譚に傷を負わせて逃走したというもの。馬に騎って逃走する途中、原憲は自分の部署に立ち寄って弩と矢、食糧を取っていったらしい。このことは56・57に、燧長王長を驗問した「辭」で明らかにした。その結果、原憲は暴行傷害、兵器の竊盜、禁止された物品（武器あるいは馬）の持ち出し、邊關を不正に越えたことの四點について、彈効されることとなった。ただし彈効の時點で原憲は逃亡中のため「案驗未竟」、すなわち原憲を逮捕尋問するには至っていない。

c 候長王褒（建武五年十二月）

- | | | |
|----|-----------------------------------|---------------|
| 62 | 迺今月十一日辛巳日且入時、胡虜入甲渠木中 | EPT六八・八三（四五九） |
| 63 | 燧塞天田、攻木中燧 ^ニ 、隊長陳陽爲舉墩上二 | EPT六八・八四（四五九） |
| 64 | 薰、塢上大表一、燔一積薪。城北燧助吏李丹 | EPT六八・八五（四五九） |
| 65 | 候望、見木中燧有煙、不見薰。候長王褒即使 | EPT六八・八六（四五九） |
| 66 | 丹騎驛馬一匹馳往、逆辟未到木中燧里所、胡虜四步入 | EPT六八・八七（四六〇） |
| 67 | 從河中出、上岸逐丹、虜二騎從後來共圍、遮略得丹及所騎 | EPT六八・八八（四六〇） |
| 68 | 驛馬持去。●案、褒典主而擅使丹乘用驛馬、 | EPT六八・八九（四六〇） |
| 69 | 爲虜所略得、失亡馬、 | EPT六八・九〇（四六〇） |
| 70 | 褒不以時燔舉、而舉墩上一苜火・燔一積薪、燔舉不 | EPT六八・九一（四六〇） |
| 71 | 如品約、不憂事邊。 | EPT六八・九二（四六〇） |
| 72 | ●狀辭曰、上造、居延累山里、年卅八歲、姓周氏、爲 | EPT六八・九三（四六〇） |
| 73 | 甲渠候官斗食令史、以主領吏備寇虜爲 | EPT六八・九四（四六〇） |

74 職。酒今月十一日辛巳旦入時、胡虜入木中

75 燧塞天田、攻木中燧、燧長陳陽爲舉塚上二藩、塙上

76 大表一、燔一積薪。城北燧助吏李丹侯望、見

77 木中燧 ☐ ☐ ☐ ☐ 候長王褒即使丹騎驛

78 馬一匹馳 ☐ ☐ ☐ ☐ 里所胡虜四步入從

79 ☐ 得丹及所騎驛馬

80 持去 ☐

81 ☐ ☐ 丹乘用驛馬 ☐

82 虜所略 ☐ ☐ 良

83 ☐ ☐ 舉塚上一苴火 ☐

84 建武五年十二月辛未朔戊子、令史 効將褒

85 詣居延獄、以律令從事

c は冒頭の日附・タイトル、末尾の甲渠候官から居延縣への送達狀を缺くほか、狀辭の後半部分に残缺が多く、結びの決まり文句も見えない。事件の概要は以下のとおり、匈奴が侵入して木中燧を攻撃したため、木中燧が規定の信號を送ったが、信號の一部が確認できなかった。そこで候長の王褒が、城北燧の助吏李丹に、驛馬に騎って狀況確認に行かせた。しかし李丹は木中燧に到着する前に匈奴に捕まり、馬とともに拉致された。その様子は木中燧からよく見えたらしく、詳しく書かれている。その結果、王褒は驛馬の不正使用、馬を匈奴に取られたこと、信號傳達の規定違反に問われ、彈劾された。この劾狀は王褒の身柄とともに居延縣の獄に送られている。

EPT六八…九五(四六〇)

EPT六八…九六(四六一)

EPT六八…九七(四六二)

EPT六八…九八(四六三)

EPT六八…九九(四六四)

EPT六八…一〇〇(四六一)

EPT六八…一一九(四六三)

EPT六八…一〇一(四六一)

EPT六八…一一八(四六三)

EPT六八…一〇二(四六一)

EPT六八…八一(四五九)

EPT六八…八二(四五九)

d 燧長王尊（建武五年十二月）

86 建武五年十二月辛未朔乙未、第十候長□敢言之、謹

87 移劾狀一編、敢言之。

88 迺十二月甲午、第十三助吏高沙隊長居延關都里王尊、

89 當作治燧斬幡、部候長王良數告尊、趣作治幡、

90 尊曰、未作治、良當將尊□

91 □尊裝先出之燧

92 中堂上、取劍盾之隊外、良隨後出、尊謂良曰、言□

93 所服若取劍良即取所□

94 相擊、尊擊傷良頭四所、其所創袤三寸

95 □取良馬、騎之第十候長趙彭所、事狀

96 □自出□□

97 □十五隧尊署□

98 □吏●案、尊以縣官事、賊傷辨

99 □吏盜良馬

100 職以令斥免

（「狀辭曰……」の一簡缺）

101 趙氏、爲甲渠候長、署第十部、以主領史迹候備寇

102 虜盜賊爲職。迺十二月□

EPT六八…一七九（四六七）

EPT六八…一六三（四六六）

EPT六八…一六四（四六六）

EPT六八…一六七（四六六）

EPT六八…一六八（四六六）

EPT六八…一七一（四六七）

EPT六八…一六九（四六六）

EPT六八…一七〇（四六七）

EPT六八…一七二（四六七）

EPT六八…一七四（四六七）

EPT六八…一六一（四六六）

EPT六八…一七三（四六七）

EPT六八…一七七（四六七）

EPT六八…一七六（四六七）

EPT六八…一七八（四六七）

EPT六八…一六五（四六六）

EPT六八…一六六（四六六）

103 午、第十三助吏高沙隊長

104 當作治燧斬幡

105 部候長王良

106 治幡、尊曰未作治、良當將尊詣官、尊裝先亡

107 之燧中堂上、取劍盾、之燧外、良隨後出、尊謂

108 良曰、言多所服、若劍、良即取所帶劍、尊

109 相擊、尊擊傷良

110 頭四所、其所創袤三寸、三所創袤二寸半、皆廣三分、深至骨、良

111 取良馬、騎之第十候長趙彰

112 所、事狀自出於

113 北走奏第十五隧、尊

114 案 尊以縣官事、賊傷辨治

115 吏、盜良馬

116 建武五年十二月辛未朔乙未、第

117 彭劾將尊

118 居延獄以律從事

EPT六八二一八一(四六七)

EPT六八二一八二(四六七)

EPT六八二一八三(四六七)

EPT六八二一八四(四六七)

EPT六八二一八五(四六八)

EPT六八二一八六(四六八)

EPT六八二一八七(四六八)

EPT六八二一八八(四六八)

EPT六八二一八九(四六八)

EPT六八二一九三(四六八)

EPT六八二一九〇(四六八)

EPT六八二一九一(四六八)

EPT六八二一九二(四六八)

EPT六八二一六二(四六六)

EPT六八二一七五(四六七)

EPT六八二一八〇(四六七)

d はやはり内容に殘缺が多く、末尾の送達狀を缺くが、「劾」と「狀」を彼此參照すると、傷害事件の概要が推測できる。高沙燧長の王尊が、再三の作業命令に従わないため、上司の候長王良が、恐らくは正式な處罰をするために、彼を候官に連れて行こうとした。王尊はこれを逃れ、劍と盾を取って外に出た。これを追って行った王良に、王尊は「今までは

言うことを聞いてきたが」とばかり斬りかかり、傷を負わせた。その後一旦は王良の馬で逃走したが、第十候長の趙彰のもとに自首して来た。趙彰はそのことを第十五隧に報告するとともに、この劾狀を作成して、王尊の身柄を伴って居延縣の獄に送った。

この劾狀は、最後に王尊の身柄を押さえた趙彰によって作成されているが、趙彰自身が事件の現場に居あわせたわけではない。かなり詳細に記された事件のいきさつは、王尊が王良から聴取したものと考えなくてはならない。現代の法的規準で言えば、もともと趙彰には證言能力がないはずである。この事例は、劾狀の作成がかなり形式化していたことを示すだけでなく、彈劾という行爲が、事件の直接の當事者以外の官吏によっても行われ得ることを示している。

e 燧長王長（建武六年正月）

- 119 建武六年□月辛丑朔癸丑、令史嘉敢言之、
EPT六八・一三四（四六四）
- 120 謹移劾狀一編、敢言之。
EPT六八・一三五（四六四）
- 121 □年九月九日、甲渠第四燧長居延平明里王長
EPT六八・一四二（四六五）
- 122 □□十三日不還●案
EPT六八・一四八（四六五）
- 123 □長因亡盡今年□
EPT六八・一四五（四六五）
- 124 正月十三日 □
EPT六八・一四四（四六五）
- 125 □十三日積五□□
EPT六八・一五一（四六五）
- 126 長吏無告劾亡、不憂事邊、逐捕未得、它
EPT六八・一四三（四六五）
- 127 案驗未□
EPT六八・一四七（四六五）
- 128 ●狀辭。公乘、居延中宿里、年五十八歲、姓張氏、爲甲渠
EPT六八・一三九（四六五）
- 129 候官斗食令史、備盜賊□職、五年九月九日、第四
EPT六八・一四〇（四六四）

130 隊長王長與守塞 ☐

EPT六八・一四一(四六四)

131 正月十 ☐

EPT六八・二二九(四七一)

132 ☐不還●案 ☐

EPT六八・一四六(四六五)

133 ☐長吏無告劾亡 ☐

EPT六八・一五四(四六五)

134 ☐事邊、逐捕未得、它

EPT六八・一五三(四六五)

135 案驗未竟、

EPT六八・一五二(四六五)

136 ☐以此知而劾、無長吏使劾

EPT六八・一五五(四六五)

137 者、狀具此 ☐

EPT六八・一五六(四六五)

138 建武六年正月辛丑朔癸丑、令 ☐

EPT六八・一三七(四六四)

139 ☐史嘉 ☐

EPT六八・一五八(四六五)

140 ☐獄以律令從事

EPT六八・一五九(四六六)

141 正月癸丑、甲渠守候 移居延 ☐寫移如律令、掾譚・令史嘉

EPT六八・一三六(四六四)

e は脱走した燧長の彈劾である。すでに前年の九月から姿を消していたようだが、正月の時点で彈劾に踏み切っている。未歸還の積算日数がある限度を越えたものか。彈劾の要件である「長吏告劾なくして亡ぐ」とは、責任ある吏員が、告發も受けていないのに逃亡したということ。舊居延簡三六・二(A33)に「☐十五日、令史官移牛籍大守府、求樂不得樂、吏毋告劾亡、滿三日五日以上」とある。「吏、告劾なくして亡」げた「樂」なる人物を搜索した記録である。當然、彈劾の時点で王長は逃亡中であり、「逐捕するも未だ得ず」、「案驗未竟」のまま書類が作成されている。

f 亭長王閼等(建武六年三月)

142 建武六年三月庚子朔甲辰、不侵守候長業敢

EPT六八・五四(四五六)

言之、謹移劾狀一編、敢言之。

迺今月三日壬寅、居延常安亭長王閔・子男同・攻虜亭長趙

常、及客民趙閔・范翕一等、五人俱亡、皆共盜官兵、

臧千錢以上、

刀劍及鉞各一、又各持錐・小尺白刀・箴各一、蘭越甲渠當

曲燧塞從河水中天田出。○案、常等持禁物、

蘭越塞于邊關儼、逐捕未得、它案驗未竟。

●狀辭曰、公乘、居延中宿里、年五十一歲、姓陳氏、

今年正月中、府補業守候長、署不侵部、主領吏

迹候備寇虜盜賊爲職、迺今月三日壬寅、居延常安亭長

王閔・閔子男同・攻虜亭長趙常、及客民趙閔・范翕等、

五人俱亡、皆共盜官兵、臧千錢以上、帶大刀劍及鉞各一、

又各持錐・小尺白刀・箴各一、蘭越甲渠當曲燧塞、從河

水中天田出。案、常等持禁物、蘭越塞

于邊關儼、逐捕未得、它案驗未竟、以此

知而劾、無長吏使劾者、狀具此。

建武六年三月庚子朔甲辰、不侵守候長業劾移

居延獄、以律令從事。

三月己酉、甲渠守候 移居延、寫移如律令 / 掾譚令史嘉

EPT六八・五五(四五六)

EPT六八・五九(四五六)

EPT六八・六〇(四五七)

EPT六八・六一(四五七)

EPT六八・六二(四五七)

EPT六八・六三(四五七)

EPT六八・六四(四五七)

EPT六八・六八(四五七)

EPT六八・六九(四五七)

EPT六八・七〇(四五八)

EPT六八・七一(四五八)

EPT六八・七二(四五八)

EPT六八・七三(四五八)

EPT六八・七四(四五八)

EPT六八・七五(四五八)

EPT六八・七六(四五八)

EPT六八・七七(四五八)

EPT六八・五八(四五六)

EPT六八・五六(四五六)

f は鷹取祐司氏も採り上げている。居延縣の亭長二人を含む五人が、官の兵器を持って、邊塞を不正に越境して逃亡したという事件。これを不侵守候長が告發したのは、逃亡者の越境地點の警備を管轄していたからかもしれない。しかし劾狀には、逃亡時の所持品などの記述も含まれている。告發者が直接には知り得なかったはずの情報も、他の人間から入手していると考えてよいだろう。

g 新占民趙良（建武六年四月）

162 建武六年四月己巳朔戊子、甲渠守候長昌林

163 敢言之、謹移劾狀一編、敢言之。

164 迺四月戊子、新占民居延臨仁里□□

165 食、之居延博望亭部、採胡干、其□□

166 中、夜行迷渡河□

167 出、案良 □

168 迹候備盜賊寇虜爲職、迺丁亥、新占民居延臨仁里

169 趙良蘭越塞、驗問良辭曰、今月十八日、毋所食、之居延博望亭

170 部、采胡干、其莫日入後、欲還歸邑中、夜行迷河

171 蘭越甲渠却適燧北塞天田出、案良蘭

172 越塞天田出入、以此知而劾、無長吏使劾者、狀具

173 此。

174 建武六年四月己巳朔己丑、甲渠候長昌林劾將

175 良詣居延獄、以律令從事

EPT 六八・二九（四五四）

EPT 六八・三〇（四五四）

EPT 六八・四七（四五五）

EPT 六八・四八（四五五）

EPT 六八・四九（四五五）

EPT 六八・五〇（四五五）

EPT 六八・三五（四五四）

EPT 六八・三六（四五四）

EPT 六八・三七（四五五）

EPT 六八・三八（四五五）

EPT 六八・三九（四五五）

EPT 六八・四〇（四五五）

EPT 六八・三一（四五四）

EPT 六八・三二（四五四）

176 四月己丑甲渠守候 移居延寫移如律令

EPT六八・三三(四五四)

gは、「新占民」の趙良なる者が、食用の植物を採っていて、夜間道に迷い、誤って天田を越えてしまったという事件である。しかしこの効状には理解しがたい点が多い。まず、官吏ではなく民間人が弾劾されているということ。これは推測だが、軍事境界線は軍隊の管轄で、その警備の規定は軍令に属するため、民間人が違反しても、まずは弾劾という手続きで書類が作られたのかもしれない。

次は日附の問題である。168～169に見えるように、趙良が道に迷って捕まったのは四月一八日丁亥の夜、候長昌林が効状を作成したのは、162に見えるように翌日の戊子、そして174・176によれば、昌林が候官發の公文書となった効状を携えて趙良を居延縣に連行したのは、さらに翌日の己丑のことだったと考えられる。しかし通常、162と174の日附は一致しなければならぬ。さらに、

177 建武六年四月己巳朔己丑、令□□

EPT六八・四一(四五五)

178 一編、敢言之

EPT六八・四二(四五五)

179 ●狀辭曰、公乘、居延宿中里□

EPT六八・四四(四五五)

180 令史、以主領吏備寇□

EPT六八・四五(四五五)

181 ●狀辭皆曰名爵縣里、年姓官祿、各如律。皆□

EPT六八・三四(四五四)

182 四月己丑甲渠守候 移居延□

EPT六八・四三(四五五)

183 以律令從事

EPT六八・五三(四五六)

といった簡も、このグループに混じっている。明らかに同じ四月己丑の日附で、令史が作成したもう一通の効状が存在したようである。181は、爰書などの例に照らして、複数の狀辭を列舉した後、それぞれが正當に作成されていることを證するまとめの文言である。⁽¹⁰⁾ これらも趙良の事件に關係するものだったとすると、四月戊子附の候長昌林の効状をもとに、令

史某の證言も新たに加えて、四月己丑附で効狀が作り直されたのかもしれない。この事例については、まだ考慮の餘地が多い。

h 燧長鄭孝（建武六年六月）

184 □廿二日己丑、廿九隊長鄭孝、與子男慶共 EPF二二・三五四（五二五）

185 白刀各一、蘭越甲渠第四燧塞天田出。案□□ EPF二二・三五六（五二五）

186 ●狀辭曰、公乘、年五十二歲、姓陳氏、建武三年九月中除、爲甲渠士吏、以迹候通 EPF二二・三五三（五二五）

187 燹火備盜賊爲職、至今年六月中□ EPF二二・五九八（五五一）

188 據譚言新除第二十九燧長鄭慶、月五日壬子昏時受遣、癸丑當到 EPF二二・三五七（五二六）

189 關微、逐捕未得、它案驗未竟、以此知而効、毋長吏使効者、狀具此 EPF二二・三六二（五二六）

190 ●狀辭曰、公乘、居延廣地里、年卅二歲、姓孫氏、建武六年正月中除、爲甲渠城北候長、以通燹火迹 EPF二二・三五五（五二五）

191 候備盜賊爲職、至今六月廿□ EPF二二・三六一（五二六）

192 白刀各一、臧千錢以上、蘭越甲渠武彊燧塞天田出□ EPF二二・三九五（五三〇）

193 越塞于邊關微、逐捕未得、它案驗未□、□□□□毋長吏使効者□ EPF二二・三六三（五二六）

hは非常に斷片的だが、他の事例と異なり、甲渠候官の文書庫と考えられるEPF二二で出土した點で、貴重な資料である。第二十九燧長の鄭孝（188では息子の鄭慶と混同されている）が、新たに任命されながら、任地に現れず、息子とともに天田を越えて逃亡したことが發覺したという内容である。筆跡から二つの狀辭が同一の冊書に屬したと思われる。ただし越境地點に關する證言には食い違いがある。

i 候長尙林・呂良（建武六年七月）

194	謹移 <input checked="" type="checkbox"/>	EPT六八・一二〇（四六三）
195	編敢言之	EPT六八・八〇（四五九）
196	甲渠守候長居延鳴沙里公乘尙林年五十 建武六年正月壬子除	EPT六八・七七（四五八）
197	<input checked="" type="checkbox"/> 長居延廣郡里公乘呂良年五十 建武六年正月壬子除	EPT六八・七八（四五八）
198	歸第八亭部田舍、月廿四日還詣部、積六日。又月廿一戊子、第四	EPT六八・一〇九（四六二）
199	守候長居延鳴沙里尙林、私去署、 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 月三日	EPT六八・一一〇（四六二）
200	還詣部積三日	EPT六八・一一三（四六二）
201	良・林所部主隊長鄭孝・侯雲亡、蘭越塞天田、出不得。	EPT六八・一〇八（四六二）
202	案、良・林私去署、皆 <input checked="" type="checkbox"/> 宿止、且乏迹候	EPT六八・一一二（四六二）
203	失蘭、不憂事邊	EPT六八・一一四（四六二）
204	●狀辭曰、居延中宿里、公乘、年五十八歲、	EPT六八・一〇七（四六二）
205	<input checked="" type="checkbox"/> 斗食令史 <input checked="" type="checkbox"/> 以主領吏備	EPT六八・一一六（四六二）
206	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 良私去官 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>	EPT六八・一一一（四六二）
207	建武六年七月戊戌朔壬寅、令史嘉劾將良・林詣	EPT六八・一〇五（四六一）
208	居延獄、以律令從事	EPT六八・一〇六（四六一）

最後の i の事例は、候長二人をまとめて弾劾した劾狀である。これかなり残缺しているが、二人とも無断で部署を離れて、何日間か行方をくらましたことなどが、弾劾の理由となっている。特に 201 には、h に登場した懸長鄭孝の逃亡事件のことが見えており、直屬の候長の監督責任が問われたことがわかる。また h と i の関連性から考えて、EPT 六八出土

の効狀關係簡は、本來E P F二二の文書庫に收められていた可能性が高い。

以上、効狀を通じて居延戰線の屬吏たちの仕事ぶりを見てきた。前章で取り上げた行政處分や處罰と、これらの彈劾事案とを比較してみよう。前者は日常的なルーティンの中での些細なミスや、その積み重ねとしての勤務評定の結果として課せられている。これに對して彈劾の方は、惡質な怠慢や不祥事に近い失態、傷害や逃亡といった犯罪行爲のように、勤務評定の範圍を越えた責任追及と嚴重な處罰が必要な事案である。多くの場合、効狀は事件の直後に作成されており、事件が彈劾に該當するか否かを判斷する、はつきりした基準があつたに違いない。たとへ形式ではあつたにせよ、効狀は「上司に命ぜられて彈劾したのではない」と斷り書きをした書類であり、その内容に誣告の疑いがあれば、告發者の身が危うくなる恐れもあつた。⁽¹¹⁾

ところで建武五〜六年(後二九〜三〇)の間、甲渠候官管内では、内容のわかる事例だけを見ても、毎月のように屬吏が彈劾されている。これがいつものことだったのか、それともこの時期の特殊事情なのかはわからない。しかしこの時期は、「建武」という後漢王朝の年號を用いていたとはいえ、河西地方は事實上、竇融の獨立政權下にあつた。邊境防備にあたる吏卒の士氣や能力の低下、綱紀の弛緩は避けられなかつたかもしれない。

III 處罰を通じて見た人事機構

(1) 彈劾處分の決定過程

前章で取りあげた効狀は、彈劾の訴狀とそれを補強する證言をまとめた書類であり、告發から處分の確定に至る、一連の手續きの出發點にあたる。九種類の効狀は、いずれも居延縣の獄あてに發信されたもので、正本が候官に残ることは本來あり得ない。

209 元康元年盡二年

A 33 二五・二一（勞六四・六五）

告効副名籍

(A) (B)

というつけ札からも知られるように、これらは控えとして候官に残された副本である。筆跡や簡の使い方もかなり粗略に感じられる。

さらにすでに指摘されているように、

210 囚律、告効毋輕重皆關屬所二千石官

EPT一〇・二A（四五）

という律が知られている。彈劾事案の發生は、効狀とともに居延縣の獄に知らされるだけでなく、當然同時に都尉府にも報告されていたはずである。しかし明らかにそれとわかる資料は、現在居延漢簡には見出し得ない。ただ、その文言は効狀とよく似ていたと思われ、前章で集成了効狀の斷片の中に、そのような都尉府あての報告書の一部が紛れ込んでいる可能性も否定できない。

彈劾手續が行われると、被彈劾者が逃亡中でない限り、その身柄は拘束されて居延縣に送られる。その間、本人が本来勤務しているはずの部署は、當然空いてしまう。

211 吏員百八人 其二人候尉不食 二人有効轍 百四人見 ☐

A 8 二七一・二二（勞一七二）

212 五鳳四年八月奉祿簿 候一人六千 尉一人二千 士吏三人三千六百 令史三人二千七百 尉史四人二千四百 候史九人其一人候史拓有効五千四百 ☐ ☐ ☐

EPT五・四七（一八）

211は、甲渠候官で食糧を支給すべき屬吏の現員數を記しているが、二人が「有効轍」、すなわち彈劾のため拘束中で不在である。⁽¹²⁾ もちろん彼らには食糧は配給されない。また212は俸祿簿で、各官秩別に月俸の總額が記されている。候史の一人は「有効」とされ、恐らく月俸の支給も差し止められたと思われる。つまり彈劾手續が開始されると、被彈劾者は自動的に無期停職扱いとなったのである。

効状とともに被弾劾者の身柄を送られた居延縣の獄では、本人の取り調べが行なわれ、告發内容の當否、また相應しい處分が擬定されただろう。現在知り得る範圍では、前述の江陵張家山漢簡に残された「奏讞書」に、その具體例がわずかに残るだけだが、手續きとして一般の裁判と異なる點はない。居延縣の獄で作成された弾劾裁判の報告書類は、今のところ居延漢簡には見當たら⁽¹³⁾ない。

しかし弾劾に基づく處分の決定や執行までが、縣で行われたとは考えられない。被處分者を官吏として處罰できるのは、人事權を持った所屬機構の責任者だけである。斥免の場合と同様、居延都尉府において、裁判の報告を承けた最終決定が下されたとすべきだろう。例えば前引21の例では、傷害事件で「論」ぜられた者の「謫」が都尉府の教書で示されている。これは通常の斥免ではなく、弾劾裁判を経た決定だった可能性が高い。

こうして都尉府で最終的な弾劾處分が決定され、候官に通知されると、候官では

EPT五六・二四(二八五)

213 □當曲隧長居延利上里公乘徐延壽年卅 五鳳四年十一月庚午有劾缺
のような書類が作られる。弾劾が成立し、免職となった燧長のポストが、正式に缺員となったことを示している。目附は處分の決定、あるいはそれが通知された日附だろう。

214 弘・勝之皆謝賢曰、會坐文事覈論、用自給、請今具償。責弘未得、責勝之已得粟

二石直三百九十、糜三石直三百六十、交錢三百五十、凡已得千一百、少二千四百、今□ A8二六・九A(勞一四〇)

214は「會たま文事に坐して覈論」せられた、二人の人物に對する借財の取り立て状。「用で自給」せざるを得なかったのは、もちろん弾劾によって免職となり、給與が出なくなつたからである。効状bやdのような傷害事件の犯人が、クビになるだけでなく、傷害罪に相當する刑罰を科せられたのかどうかは、今のところわからない。

屬吏に對する彈劾や斥免が行われると、當然上司の監督責任の問題が生ずる。例えば前述iの効状では、燧長の脱走について候長の監督責任が追及されている。このように上司まで彈劾されることは珍しいとしても、監督責任が問われない

はずがない。

215 及不過界中如牒、謹已劾、△領職教敕吏母狀、叩頭死罪

EPF二二・一三一（四九九）

216 趙臨開備臧內戸、盜取卒閱錢二千四百、謹已劾、備職事無狀

EPT五〇・一五四（一三九）

217 燧長侯倉・候長樊隆皆私去署、誠教敕吏母狀、罪當死、叩頭死罪死罪敢言之

EPF二二・四二四（五三三）

218 甲渠鄯守候黨、兇冠叩頭死罪死罪、奉職數母狀、罪法重疊、身死

EPF二二・二八六（五一七）

219 叩頭死罪死罪、府記曰、主官夏侯譚母狀斥免、黨叩頭

EPT二〇・五（五五）

220 黨叩頭死罪死罪譚素公廉爲主官出入卅餘□九月

EPT二〇・一二（五六）

これらは「私去署」など部下の違反行爲をあげて、「吏を教敕すること母狀」と監督責任を認め、謝罪した簡である。大げさに謝罪の文句を並べた書類の断片は、他にも相當な數が存在する。

216は、成卒から預かった錢の盜難について「職事無狀」と謝罪する。この中に見られる「謹みて已に劾す」という表現は、「すでに彈劾済み」という意味か。候官の長である鄯候も、こうした監督責任を免れることはできない。217～218は甲渠鄯侯が都尉府に提出した謝罪文。219～220は、都尉府からの屬吏斥免通知を受けて書かれ、辯明に努めている。このような謝罪文は、これを受けてさらに監督責任が追及される可能性もある以上、單なる謝罪文や始末書というよりも、一種の進退伺いと考えた方がよい。例えば劾狀bの傷害事件は鄯侯の目の前で起こり、しかも屬吏と書間から酒盛りを始めたのは鄯侯自身であった。謝罪と辯明に一言あつてしかるべきだろう。⁽¹⁴⁾ ちなみに主官令史夏侯譚はこの事件で傷を負わされた男である。

(2) 缺員の補充

213で見たように、斥免處分や彈劾の決定が下されると、必然的に吏員のポストに缺員が生じ、補充の人員を手當てしな

ければならない。

221 敢言之、謹移吏缺如牒、唯府令閑田除補、敢言之。

EPT五九・三九(三四六)

222 缺、唯府除補、叩頭死罪敢言之。

EPT七・四一(四一)

223 貧急軟弱不任職、請斥免、可補者名如牒書□

A8二三一・二九(二八四)

224 吏斥免缺如牒、唯

EPT六・八〇(三四)

225 甲渠城北燧長徐惲 有劾缺 惲燧居主養驛馬

EPF二二・三五二(五二五)

226 府省察、令居延除吏次各補惲等缺、叩頭死罪敢言之

EPF二二・三五二(五二五)

227 第十士吏馮匡 斥免缺

EPF二二・二五三(五一三)

228 歸就農、謹斥免匡缺如牒、唯

EPF二二・三四五(五二四)

221 に見える「閑田」は居延縣の王莽時代の名稱。225は、221に見える「吏の缺」を記した牒の實例である。このような彈劾による缺員補充ももちろんあった。ちなみに徐惲なる人物は、彈劾で燧長を免職になった後も、燧に留まって馬の世話をしていたらしい。歸る所がなかったのだろうか。227は斥免による缺員の牒である。228に見えるように、こちらは故郷で歸農することになっている。

227・228に見える馮匡は、前章aの劾狀で彈劾された人物である。aによれば、彼は王莽時代の末年に第四部の士吏となったが、病氣などで勤まらず、第十部士吏に轉じた後、彈劾される仕儀となったらしい。しかし彈劾による免職ならば、225と同様「有劾缺」と記されるはずであり、227に見える「斥免缺」は理解しがたい。そもそも劾狀aは、斥免の事由とこれを證明する爰書で事足りる内容である。そのせいか42の劾狀本文の締めくくりでは、劾狀だけが居延縣に送られ、本人を連行してはいない。正式な彈劾裁判に至らずに、斥免處分となったのかもしれない。

さて、候官から前述のような缺員補充の要請を受けると、都尉府から居延縣に補充人員の人选が命ぜられる。居延縣は

これを受けて、ポストに相應しい人物を選び、例えば次のような人事プランを立てる。

229 牒書、吏遷斥免給事補者四人、人一牒

EPF二二・五六A(四九〇)

建武五年八月甲辰朔丙午、居延令 丞審告尉、謂鄉、移甲渠候官、聽書從事如律令

230 甲渠候官尉史鄭駿 遷缺

EPF二二・五七(四九〇)

231 故吏陽里上造梁普年五十今除補甲渠候官尉史 代鄭駿

EPF二二・五八(四九〇)

232 甲渠候官斗食令史孫良 遷缺

EPF二二・五九(四九〇)

233 宜穀亭長孤山里大夫孫況年五十七 黨事 今除補甲渠候官斗令史 代孫良

EPF二二・六〇(四九一)

轉任のため生じた二つの空きポストが埋められているが、新たに任命される二人の人物のうち、231は肩書きから見て現任の官吏ではなく、新規採用である。233は居延縣の現役の亭長だろう。居延縣では、縣の現任の屬吏と、民間の候補者を含む廣い範圍から、適任者を選び出したようである。ただし永田英正氏が指摘するように、この冊書が縣から候官に直接送られたのは、何かの特殊事情による變則的な例ではなかったかと思われる。⁽¹⁵⁾

234 府記曰、遣新占男子劉遷、代燧長

EPF二二・六四八(五五四)

のように、本來は縣から都尉府に人選の原案が提出され、都尉府の決定として通知されるのが、通常の姿だろう。

ところで231の梁普という人物には、「故吏」という一種の肩書きがついている。

235 故吏居延安國里公乘龍世年廿五 今除爲甲渠尉史代許昌

EPT二・七(二)

236 故吏閑田金城里五士周育年三十二可補高沙燧長代張意

EPT二七・八(六二)

237 故吏居延肩水里蘇慶年卅五

EPT四〇・一七八(七八)

これらはいずれも人事關係の書類の一簡である。「故吏」とは、かつて官吏であった者を示しているようだが、もと就いていた官名や經歷を細かく記すわけではない。公職經驗者という意味での、一種の資格と考えられる。もちろん後漢末の

「門生故吏」の「故吏」とはかなりニュアンスが異なる。⁽¹⁶⁾ 居延縣ではこのような「故吏」を、戸籍上で把握していたか、あるいは官職敘任の待機リストに載せていたに違いない。

ちなみに、舊居延漢簡には、

238 官大夫、年廿四、姓夏氏、故民、地節三年十月中除爲

A 33 一〇・一〇（勞一三）

という奇妙な肩書きを記したものである。名縣爵里や年姓を述べる、爰書など供述書のスタイルだが、ここに見える「故民」は、「故吏」とは反対に、以前は官職未経験の民間人だったことを示すのかもしれない。他に例を見ない書き方ではあるが。

(3) 縣の機構の役割

すでに見てきたように、居延都尉府管内では、候官の屬吏の處分や補充人員の候補者選定といった業務に、居延縣が微妙な関わり方をしている。最後の考察として、都尉府—候官の機構と縣の關係を整理してみたい。

まず彈劾の際に、候官から居延縣の獄へ、劾狀と被彈劾者の身柄が直接送られ、ここで裁判が行われることを、どのように解釋すればよいだろうか。彈劾裁判において、居延縣の獄の役割は、事實を究明し、處分内容の原案を作成する、限定的なものであった。⁽¹⁷⁾ その實務が居延縣の獄に回されたのは、居延縣に特殊な權限があったからではなく、そこが獄舎と取り調べの専門家の揃った、最寄りの獄だったからである。都尉府は軍事機構ではあるが、現代の軍隊のように、民政機構と完全に切り離された、自律的で閉鎖的な組織を完備していたわけではなかった。

一方、補充人員の選定を居延縣が行うことの理由は、前節の資料から明らかである。都尉府は、民政に直接關與していない以上、官職未経験の民間人や「故吏」には、直接手が届かない。このような民間人を含む広い範圍からの人選は、戸籍を握る縣にはじめて可能なのであり、都尉府の人事に縣が關わるのも、その點で當然のことであった。しかし縣が

關わり得るのは、人員の新規補充や異動の原案作成までであり、縣が都尉府の屬吏に對して直接に轉屬命令を出すことはあり得ない。⁽¹⁸⁾

官制上、都尉府と縣とは直轄的な上下關係にはない。とはいえ現實には、都尉府から管轄違いの縣に對して、さまざまな仕事が行われている。これは都尉府の機構において、配下の候官では處理できぬ行政實務が、現在で言えば機關委任事務として、縣の機構に回されていたのだと解されよう。

おわりに

以上、居延漢簡に見える官吏の處罰をめぐって、さまざまな場面を見てきた。最後に、文獻史料の世界への橋渡しをして、締めくくりとしたい。

居延縣に、「故吏」という官職経験者がかなり存在していたことは、注目に値する。もとより漢代には、時期を見て圓滿に役所を退職する致仕の慣習は存在せず、もちろん親の喪に服する丁憂も制度化されていない。漢代の「もと役人」は、すなわち「かつてクビになった役人」なのである。⁽¹⁹⁾「故吏」が資格として機能し、彼らの中から官職に再登用される例が少なくないことは、免職となったという經歷が、必ずしもマイナスにならなかったことを意味する。

列傳などの史料において、「病を稱して」役所を辭めることは珍しくない。病氣缺勤の日數がある限度を越えると、免職となる規定を逆手に取った辭め方なのだが、これは漢簡の世界で目にする斥免の手續きにはかならない。また、「某事に坐して」免職された場合、⁽²⁰⁾の事例で「會たま文事に坐して數論せられ」たなどと氣取った言い方が同時代から存在するように、實は彈劾裁判に引かかったという意味であった。さらに前漢末ごろから、役所の辭め方として「自劾して去る」、すなわち自分で自分を彈劾するという方法が現れる。自分を彈劾する劾狀を書き置きに、故郷に引き揚げるのだから。その場合、被彈劾者が逃亡したのだから、事は「案驗未竟」のまま、ほとんど自動的に彈劾が成立したに違いない。

もちろん指名手配などで追われることはなかったはずである。

甲渠候官の屬吏たちは、さまざまな罰則に縛られながら、實に多様な失態を演じては、免職になったり、彈劾されたりしていた。監督責任を問われる上司たちも、安閑とはしていられない。その厳しさは、確かに當時の官僚機構の一面ではある。しかしその一方で「故吏」の登用に見られるように、漢代の官僚機構には、いわば人材をリサイクルするシステムも備わっていた。列傳に登場するエリートたちも、失敗して振り出しに戻れば、故郷で一人の「故吏」として出直すことができたのである。彼らとて、本稿で見てきた邊境の小吏たちと、違う世界に住んでいたわけでない。

前漢の末近い時期に酷吏として名を馳せた尹賞は、病死する直前、息子たちを戒めて次のように遺言した。

丈夫の吏たる、正に殘賊に坐して免ぜられよ。その功效を追思すれば、則ち復た進用せられん。一たび軟弱不勝任に坐して免ぜられれば、終身廢棄せられて赦時あることなし。その羞辱は貪汚坐臧よりも甚し。慎みて然るなかれ。⁽²⁰⁾

「殘賊」を善しとするか否かはともかく、官僚としての心構えを、免職處分の事由とやり直しのチャンスから説いた點で、この遺言は漢代の官僚制度の一面を、見事に浮き彫りにしているように思われる。居延戰線の、あまり有能とは言い難い屬吏たちにとっては、少々耳の痛い言葉だったかもしれないが。

註

- (1) 大庭脩『秦漢法制史の研究』（創文社 一九八二）、永田英正『居延漢簡の研究』（同朋舎 一九八九）参照。

- (2) 漢簡に見える考課の制度については、簡便には大庭脩『木簡學入門』（講談社學術文庫 一九八四）参照。

- (3) 徐元邦・曹廷尊「居延出土的候史廣德坐不循行部檄」

『考古』一九七九年二期）参照。

- (4) 肩水金關址から「勞邊使者過界中費」なる冊書が出土して

いる（EJT二二・二一〇）。中央から派遣された勞邊使者が、肩水候官の管轄區域にいる間の、經費の明細である。

甲渠候官出土のこの簡が、同じ時のものとは限らないが、このような使者は行く先々で手厚いもてなしを受けたらしい。

甘肅居延考古隊「居延漢代遺址的發掘和新出土的簡冊文物」

『文物』一九七八年一期）、大庭脩註（2）前掲書一七〇頁参照。

- (5) 佐原康夫「居延漢簡に見える物資の輸送について」(『東洋史研究』五〇卷一號 一九九二) 参照。
- (6) 榎山明「爰書新探——漢代訴訟論のために——」(『東洋史研究』五一卷三號 一九九二) 参照。
- (7) 鷹取祐司「居延漢簡効狀關係冊書の復原」(『史林』七九卷五號 一九九六) 参照。
- (8) 江陵張家山漢簡整理小組「江陵張家山漢簡《奏讞書》釋文(一)(二)」(『文物』一九九三年八期、一九九五年三期)、また池田雄一ほか「江陵張家山漢簡《奏讞書》——中國古代の裁判記録」(中央大學 一九九六)に譯註がある。
- (9) このような證言がなぜ「爰書」と呼ばれないのかが不思議である。推測だが、「狀辭曰」は効狀の不可分の要素で、これだけが單獨の書類として扱われることはなかったのではないだろうか。
- (10) EPT五一・二二八の爰書に「……乃驗問際長忠・卒賞等辭、皆曰名郡縣爵里年姓官除、各如牒……」とある。
- (11) EPT五六・一七五に「[?]怨昌、効輔火誤守乏、即誣簡言……」とあり、彈劾が誣告であることを訴える内容を持った書類である。
- (12) 江蘇東海縣尹灣六號漢墓出土の五號牘(正面)は、出張や病氣、死亡、未着仕などの事由によって、現在本来の任地にいない官吏のリストである。その中で二人が「有効」として挙げられている。居延漢簡の場合と同様、停職扱いで職務を外されていたのである。連雲港市博物館「尹灣漢墓簡牘釋文選」(『文物』一九九六年八期) 参照。
- (13) もちろん、彈劾を提起した候官と都尉府や居延縣との間で、何らかのやりとりはあっただろう。例えば「効狀辭曰、公乘、日勒益壽里、年卅歲、姓孫氏(以下略)」(A 33 二〇・六)という簡は、「狀辭に曰く」ではなく、「効狀の辭に曰く」と書かれている。この簡は効狀自體の一部ではなく、「効狀」に含まれる「辭」として、別の書類に引用された可能性がある。問い合わせなどに應じて、候官で効狀の内容が再調査されることは十分あり得る。
- (14) すでに鷹取論文が指摘するように、EPT二〇・六には「死罪死罪今年八月中候繆訴客男子賈襄持酒」とあり、効狀bと關係がありそうである。この簡は219と220と筆跡まで完全に一致する。郭侯が提出した複数の謝罪文の控えを、まとめて一編の冊書にしたのかもしれない。しかもその間に郭侯が交代している點が興味深い。
- (15) 永田英正註(1)前掲書第七章「再び漢代邊郡の候官について」参照。
- (16) 東晉次「後漢時代の故吏と故民」(『中國中世史研究續編』京大出版會 一九九五所收) 参照。
- (17) この點は通常の裁判でも同様である。榎山明「居延新簡『駒罷勞病死』冊書——漢代訴訟論のために——續——」(『堀敏一先生古稀記念 中國古代の國家と民衆』汲古書院 一九九五) 参照。
- (18) 縣の屬吏が都尉府に轉屬するだけでなく、都尉府から縣に轉屬する場合もあることが知られている。とすれば都尉と縣とは、屬吏の人事について共通の地域ブロックを構成してお

り、縣が全體を見渡した人事異動を立案したのかもしれない。なお、本稿と位置づけが異なるが、角谷常子「漢代居延における軍政系統と縣との關わりについて」(『史林』七六卷一號一九九三) 參照。

(19)

『史記』卷三〇平準書に、武帝時代のこととして「故吏皆適令伐棘上林、作昆明池」とある。「故吏」がなぜ動員されるのかについて、三家註や『漢書』食貨志の顏師古註で解釋が分かれている。「故吏」が本來、何か落ち度があつてクビ

になった役人であることを考慮する必要がある。本稿に引きつけて解釋すれば、要するに「故吏」のリストが「謫吏」のリストに編入され、勞働力として徵發されたのではなからうか。

(20)

『漢書』卷九〇酷吏尹賞傳「丈夫爲吏、正坐殘賊免。追思其功效、則復進用矣。一坐軟弱不勝任免、終身廢棄無有赦時。其羞辱甚於貪汚坐臧。愼毋然。」

HAN PUNISHMENT OF MILITARY OFFICERS AS RECONSTRUCTED FROM THE JUYAN HANJIAN

SAHARA Yasuo

Han-era wooden slips excavated at Juyan 居延 in 1973 include a variety of previously unknown documents. This article examines the documents among these that concern the penalties inflicted upon military officers and the penal administration system as a whole.

Military officers serving at the Juyan front inevitably made errors during the course of their daily routine, and such errors occasionally called for severe penalties and punishments according to *ling* 令. These penalties included transmission of military supplies as punitive labor, dismissal in light of periodic efficiency ratings (*chimian* 斥免), etc. In cases of serious violation of military discipline—desertion or crime, for example—an official prosecutor (*hezhuang* 劾狀) was sent to the court in Juyan prefecture, and he was responsible for bringing the accused to a trial in which the proceedings were similar to that of ordinary lawsuits. This indicates that the Han military had no specific system of court-martial provided for in its organizational structure.

Officers dismissed from duty through these punishments remained qualified to be listed among candidates for official posts, and they often retained opportunities to be promoted again. This indicates that the Han bureaucracy provided a system for the recycling of experienced talent which existed alongside its severe system of rating and punishment of government and military officials.